

報告タイトル

ジョコウィ政権下の政軍関係
“Civil-Military Relations in Indonesia under Jokowi”

氏名（所属）

矢吹 真二郎（防衛大学校）
YABUKI Shinjiro (National Defense Academy of Japan)

要旨（800 字程度）

現代インドネシア政軍関係を一言で表現するならば、「国政レベルにおける国軍のフォーマルな政治プロセスからの撤退は継続しているものの、その役割と影響力は拡大している」といえる。ここに、一見すると相反するようなパズルが存在する。本研究は、軍改革が定着しつつあるにもかかわらず、国軍の影響力が再び拡大している要因を明らかにする。

冷戦期、東南アジアでは軍に強力に支援された権威主義国家が多く存在した。民主化を機に、これらの国の多くで軍は政治から撤退したものの、軍に文民優位や政治非関与の規範を定着させることは容易ではない。その中で、1998 年のスハルト政権崩壊後の平和的な軍改革と、その成果が現在に至るまで継続し、良好な政軍関係を維持しているインドネシアは改革の成功例と評価できる。しかし、近年はインドネシアにおいても、タイやミャンマーのような明示的な権力奪取はないものの、国軍の影響力と役割が拡大傾向にある。その要因を、先行研究はジョコ・ウィドド大統領が自らの体制強化のために軍の支援を必要とし、その影響力拡大を許容している指摘する。これらの説明は、軍の影響力が拡大した要因を指摘するが、国軍が影響力を拡大できる機会を得た時に、なぜ政治から撤退したにもかかわらず、再び影響力を拡大させたのかという国軍の動機までは十分に説明できてはいない。

本研究は、軍改革の何が定着し、何が定着しなかったのかを具体的に明らかにし、軍改革定着と影響力拡大という相反する事象を、国軍の正統性（legitimacy）と軍事的有効性（effectiveness）の観点から説明した。国軍は政治から撤退することにより国民の信頼を獲得し、国防費の増加や装備の近代化を実現した。一方で、非伝統的脅威の台頭、国軍の伝統的価値観や国防思想は軍を兵舎に留めることを許さず、安全保障周辺分野への関与を促した。正統性と有効性という基本的には相反する要素を向上させようというジレンマの中で、現在の政軍関係が形成されたことを指摘する。